

# 第17回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

第17回  
文芸思潮  
エッセイ賞

二〇二二年度第17回「文芸思潮」エッセイ賞は、一六七篇という、昨年よりも半分ほどに激減した応募数でしたが、内容はたいへん充実しており、上位レベルの作品はむしろ多く、特に佳作から奨励賞の層の厚さから選考も白熱しました。今回も十代後半から八十代後半までの広い年齢層と同時に、地域的にもアジア、太平洋と広く、歴史として重要な記録や、社会への鋭い批評も含まれた、刺激的な内容でした。

例年の通り、まず予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、さらに最終選考作品選出ののち、最後に三神弘、水木亮、都築隆広、五十嵐勉四人の選考委員によって七月三十日山梨県甲府市において最終選考会が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀作および優秀作を発表させていただきますが、以後奨励賞作品も、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

また明年も同じ要領で募集いたします。どうぞ奮って力作エッセイを御応募ください。お待ちしております。

## 「文芸思潮」エッセイ賞

### 最優秀賞

### 「奇妙な依頼」

平尾富雄

(神奈川県川崎市)

### 奨励賞

「桜の聲を聞く前に」

中條 響 (長野県長野市)

「挽歌」

苑田有子 (広島県広島市)

「あいつのメロディー」

ツキノマコト (東京都北区)

「都忘れ」

小林宏子 (北海道札幌市)

「鍵の開いていた部屋」

森崎律子 (大阪府大阪市)

「白い肌の記憶から」

植田郁子 (京都府京都市)

「メキシコの地下鉄」

本間芳江 (東京都武蔵野市)

「父は語らず」

友 修二 (茨城県笠間市)

「花嫁の鱈」

早月春美 (富山県中新川郡)

「積み団子」

青地久恵 (北海道釧路市)

「ひよんと死ぬるや」

斎藤はな絵 (北海道岩内郡)

「今だから話せるベニヤ板の思い出」

林 須磨 (京都府城陽市)

「スケート部『五部』」

武藤蓑子 (東京都多摩市)

「われ目」

洗狐 (神奈川県横浜市)

「星の旅人」

神谷 恵 (熊本県天草市)

「彼方の我が家」

稲葉真季 (東京都世田谷区)

「循環」

七尾美日 (埼玉県三郷市)

「首吊り遊戯」

六枝オリヒメ (香川県坂出市)

「あわや、特殊詐欺に遭いかけて」

牧 康子 (東京都杉並区)

## 優秀賞

「三代鉢」

中村郁恵

(北海道札幌市)

「母の東京一九六四」

金田一淳

(青森県三戸郡)

「終に見た手鏡」

家森澄子

(岡山県倉敷市)

「ファスト」

宮尾美明

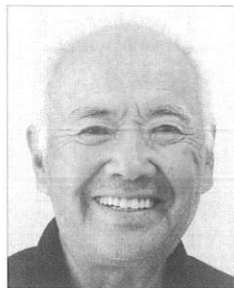
(愛知県安西市)

## ドキュメント優秀賞

「ウンドウカイという名のフェスティバル」

末永卓幸

(ミクロネシア・チューク)



みずき りょう

作家・劇作家・演出家  
1942 北朝鮮生まれ  
99 小説「祝祭」で  
第16回織田作之助  
賞受賞  
2006 小説「お見合いッ  
ァー」で第49回農  
民文学賞受賞  
戯曲も多数ある

## 最後に何を伝えるか

### 高齢者の願い

#### 水木 亮

今年の応募作品の全体の感想は、作品の質的レベルは上がったが、例年のような独創的な断トツの作品がなかった。しかし、高齢者が自分の人生を振り返り、どうしても書き残しておきたい作品が多く見られた。そこに希望があり、高齢者と歩むこのコンクルの願うところでもあり、とても良かったと思う。以下に残った作品について感想を述べたい。

#### 「奇妙な依頼」

最優秀に選ばれたこの作品は、貴重な南北朝鮮の交流の

平尾富雄

次に奨励賞で私が印象深いのは、次の作品である。  
「都忘れ」

小林宏子

人生を「花」と共に生きてきた自分の生命力を、「都忘れ」にちなんだ後世に伝えたいというその熱い思いが伝わる秀作である。

#### 「白い肌の記憶から」

奨励賞に選ばれたこの作品は、中学生のとき自分を虐めた男性が、実は不幸な家庭で胃潰瘍を病んでいたこと。その彼が妹だけを愛した事実を、歳月を経て愛しく思う気持ちを書いた。

植田郁子

ガンになった妻の治療について、対応する医者がありかたについて書いた。タイトルはやや感情的だが、患者の身になればその気持ちはわかる。病気の妻に寄り添う夫の切ない気持ちはよく書かれていると思う。

相澤真理子

年輪の奥ふかさを感じさせるエッセイである。しいて言

えば、その少年に「ありがとうね」と手を合わせる作者の動機が弱い。説明ではなく描写でしっかり伝えることが大事だと思う。

#### 「われ目」

高校生の作品である。思春期の少女が父親を見つめる視線が独創的、ユニークで読ませる。これからが期待される。

洗狐

以下印象に残った佳作作品について触れたい。

#### 「父の玉子とじ」

鎌田誠

誰にも人生を振り返るとき、自分でしたこと後悔することがある。父親が心を込めて作った「モヤシの玉子とじ」にありがたうと言えなかった自分。その後悔が一三回忌を経て心に残る気持ちをよく書いている。

#### 「女医は何人殺したか？」

鈴木正治

時間を伝えている。

#### 「父のお経」

近藤幹夫

白内障になり行方不明になった柴犬「リュウ」の話で、これを取り巻く家族の思い、死んだリュウを可愛がった老いた父親の姿など、犬猫を愛しむ高齢者には切ない人生の時間を伝えている。

人間一度きりの人生を悔いなく終えるために、自分の一生で忘れられない思い出を記録することは、その人の人生の終活でもある。何も残さず死ぬのもよい。しかし記録しておけば誰かが読む。呼んだ人は、ああ、そういう人生もあったのかと改めて思う。最近親せきの個人の膨大な書物整理をしていて、いろいろな新しい人生の発見があり、楽しい。今回入賞こそしなかったが、貴重な経験を書かれた高齢者の作品が多かった。それはとても大事なことである。来年もいろいろな作品を読みたい。

手伝いをした記録が書かれている。よい仕事をなさったと思う。タイトルは「石油缶一杯のメンタイコ」でもよい。

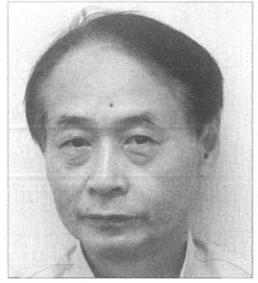
金田一淳

優秀賞に選ばれたこの作品は、オリンピック選手を世話した両親の思い出を書いた。描かれている母親の温かい思い出を、こうして文章にした息子がいることを、あの世の母親は喜んでることだろう。

#### 「ファスト」

宮尾美明

優秀賞のこの作品は、四〇代で脳出血で倒れた夫の介護を三〇年もしていた作者が、ある朝自分の身体に奇妙な気配を感じ、救急車を自分で呼んで入院し、脳梗塞の治療を受けて、一週間で夫の介護もあり再び自宅に戻る。実際にリアルに高齢者の日常の生きざまを、息もつかせず読ませる。身体が自由に利かなくなり、尿を採取してくれたのが自分の教え子であった奇跡。高齢者はいつ自分がそういう状態になってもおかしくない。その現実をよく伝えていて、広く高齢者が生きる上での参考にもなる。「ファスト」という脳溢血察知のキーワードを口ずさみながらの、再出発した作者のアトリエの姿は、残された生きることへの貴重な時間を私たちに感じさせる。



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ  
79「流瀆の島」で群像  
新人長編小説賞受賞  
98「緑の手紙」で読売  
新聞・NTTプリンテック  
主催第1回インターネット  
文芸新人賞最優秀賞受賞  
2002「鉄の光」で健友館  
文学賞受賞

## キャリア層の充実

### 五十嵐勉

いつも三〇〇人前後の応募者数があつたエッセイ賞だが、今年に限って一六七篇と激減した。これは「公募ガイド」に載せてもらえなかつたためだろうか、いい作品もそれに比例して減るかもしれないなどと懸念していたところ、そんな数字の懸念は吹き飛ばすくらい、いい作品が押し寄せた。特に奨励賞と佳作の層は分厚く、どれを奨励賞にし、どれを佳作に落とすかで苦しむほど、良作が目白押しだった。

ただ、若干、いつもより優秀作が少ない結果になった。しかも、優秀作は常連が揃い、これまでキャリアを十分に示してきた筆者が勢揃いしたような形になった。ニュー

フェイスも期待したが、少し文章に薄さが目立ち、キャリア層を打破するほどの勢いは持ち得なかつた。今回は若手に大いに期待したい。

この二、三年、最優秀賞に決定的な優秀作が現れないことも憂慮していたが、今回は大迫力の作品が登場し、胸を撫で下ろした。その作品は平尾富雄の「奇妙な依頼」で、北朝鮮と韓国との間の手紙を日本で中継して届けるという希少行為を題材にしたものである。一九五〇年代の朝鮮戦争のために国交の断絶したままの韓国と北朝鮮の間は、互いに手紙が届かない。むろん電話もできない。肉親が分断されたまま、三八度線で生き別れのまま暮らしている現実が、ここには手紙を象徴して、浮かび上がってくる。北朝鮮からは日本に手紙が届き、日本から韓国には手紙が届く。このルートを使って、数十年を超えた家族の分断の悲痛な叫びが交わされる。朝鮮戦争の、いまだに生きて裂かれる者の肉声が、二十一世紀の現代に響き届いてくる。そこには朝鮮民族の情愛の濃さも流れているが、手紙によつて慟哭するその現実、携帯電話や、ラインや、電子メールで簡単に繋がりがや交信を得られる現代の生活の中で、逆に人間の繋がりの根底の力を浮かび上がらせてくる。二重にも、三重にも、我々の足元を脅かしてくるものがある。同時に、人間にとつて何が真に大切なものであるかも、照射してくる。感銘を受けた作品だった。

## 佳作

- 「夫が撮つたアフリカライオン」 松原泰子
- 「平岡小学校」 栗山佳子
- 「群れ」 田中浩司
- 「善意の表し方」 平野靖雄
- 「本物」 有澤かおり
- 「就労継続支援B型における『工賃』という呪い」 松橋雅鳳
- 「父のお経」 近藤幹夫
- 「キンランの階段」 高尾周一
- 「最南端高校・教師おとひめ」 藤田 侃
- 「主婦売春の汚名を着せられた」 紙屋里子
- 「シャツをはいた友」 菱川町子
- 「結局ブラック企業」 三上櫻子
- 「消えた弾」 虎姫
- 「返信」 マツイアキラ
- 「心残りだったろうなあ」 相澤真理子
- 「母恋」 三木俊平
- 「タンゴ……それは人生」そして母子の共戦譜」 安部としき
- 「父のザンネン」 青柳みすず
- 「食」―学生時代の思い出」 諏訪崎はるえ
- 「紙芝居へ込めた想い」 野宮健司
- 「今しかない感情を書く」 春木美子

- 「オマール君の墓」 田中美晴
- 「父の玉子とじ」 鎌田 誠
- 「日本&ウルグアイ」タンゴの架け橋となつて」 小原みなみ
- 「姉妹のウナギ」 春本幸洋
- 「かいわれサラダ」 小谷 桜
- 「まろと私」 古池真矢
- 「人のころには闇がある」 峰川修一
- 「嗣げない志」 上野 達
- 「独り言ち(ひとりごち)」 丸山順子
- 「根源乃手、吉本隆明と吉増剛造をめぐる」 弟子丸博道
- 「揚げパンの幽霊」 小鳥遊要
- 「笑顔の達人たち」 戸浦次郎
- 「雨男との対決」 鈴木邦夫
- 「シベリア鉄道の旅1974」 竹本祐子
- 「ははの記憶」 岩田ふじこ
- 「苦難を越えて」 熊谷和代
- 「小林秀雄の告別式」 西島雅博
- 「女医は何人殺したか？」 鈴木正治
- 「カーテンをしつかりしめて」 丘田ミイ子
- 「夢解き」 山田まさ子
- 「君死に給うこと勿れ」 岩崎 裕
- 「切り株を」 エビハラ
- 「兄」 益田和則

戦争に関する作品がいくらか復活した観のある今回だが、その面からも異色のレポートとなっているのは、末永卓幸氏の「ワンドウカイ」という名のフェスティバル」である。トラック島は旧ドイツ領であった島が、第一次世界大戦の結果、日本の委任統治領になり、その後太平洋戦争では、海軍の一大根拠地となつて、戦艦大和や武蔵の連合艦隊の出撃基地となつていた。現在はミクロネシアという新たな国の一部となつているが、ここに現在も、日本統治時代の文化の遺産が「運動会」として息づき、元来の民族の闘争本能の発露に大いに役立っているという話である。この話は新鮮で、ミクロネシア現地で生活している末永氏でなければ書けない興味深いレポートとして読ませてもらった。これは特別に「ドキュメント優秀賞」を設けて称揚することとした。これからもミクロネシアからの貴重な報告を届けてほしい。

今回読ませてもらった候補作の中で、特に文章が傑出している二作があった。中村郁恵氏の「三代鉄」と中條響氏の「桜の聲を聞く前に」である。「三代鉄」は父、母、自分と三世代にわたつて生垣を刈る話だが、そこに紡がれる文章の息づきは優れていて、名文の域に達している。「小さな盥に汲んできた水を指先に含ませ、砥石の面に数滴ずつ落とす。滴は、陽を返し微細な光を庭の緑に鏝めていった。水気に呼び覚まされた砥石の面が、鉄を待っていた。」

という部分などには感心した。これだけでも優秀賞に値する。まとめ方も以前よりうまくなり、技量を上げていることを確信した。鉄によって受け継がれる家の一部と行爲とを、失われる変遷を重ねて、哀惜をしっかりと残している。

「桜の聲を聞く前に」は、「桜には旋律がある。」から始まつて、儂さを帯びたトーンが淡い色で流れていく。「春のやわらかな風を感じる頃に、桜の聲を聞きたいのだと、彼女は話してくれた。生ける花は季節によって異なるが、桜を生けることはない。生けた桜ではなく、大地深くに根をおろす桜の聲を聞きたいからだと言っていた。傍らの桜の幹に手を添えて、自分の心に迷う時、桜の聲が正してくれるのだと、静かな声で言っていた。」この主旋律は最後まで失われることなく、儂いものへのやさしさを帯びて、人世の風の中へ消えていく。現象の色の、失われていくからこそ美しい何かを残して、流れ去っていく。文章のトーンには深い魅力がある。残念ながら他の選考委員の評価が得られず、奨励賞に留まったが、私はこの作品を高く評価した。この文章を大事にして、これからも書き続けてほしい。

金田一淳氏の「母の東京一九六四」は、家の苦闘の変遷の果てに東京オリンピックの選手強化センターの管理人に就く話で、当時有名だった選手が何人も出てくるのが懐かしい。表舞台の栄光の影に触れる味わいも深く、マラソン

の円谷や君原、ハードル走の依田郁子が生き生きと登場し、またその後の自殺事件も、回顧の中に陰影を深くして蘇ってくる。ベテランらしい一作で、支持を集めた。

同じく優秀賞の家森澄子氏「終に見た手鏡」は、戦争で父を失い、後を引き受けて四人の子供を育てなければならなかった母も過労で死に、姉妹バラバラに生きなければならなかった戦後の家族の運命が、一つの手鏡によって鮮や

かに浮かび上がってくる、感銘を呼ぶ作品である。母親から最も遠く離れる妹に、形見として手渡す手鏡が、母の愛情を深めて蘇ってくる。家森氏の原点を示す作品として、評価せずにはいられなかった。

宮尾美明氏も何度か受賞しているベテランだが、今回は「ファスト」という脳梗塞を題材にした、これまでとは違った作品を提出してきた。脳梗塞を題材にした作品は、

## 入選

- |                         |        |
|-------------------------|--------|
| 「父母と私」                  | 田浦チサ子  |
| 「『何も得られなかった実感』への肯定に関して」 | 古井ふきこ  |
| 「あっ君も卒業したよ」             | 倉沢辰子   |
| 「苦境に立たされた兄妹を想う」         | 佐高源    |
| 「新『たら・れば』宣言」            | 武中彩    |
| 「二刀流」                   | 九条之子   |
| 「燃え尽きるな小児科医」            | 秋谷進    |
| 「母の残したつれづれ記」            | 松谷直美   |
| 「『おけい』の墓」               | ゴルビー長田 |
| 「サレヨ」                   | 瀧沢鈴    |
| 「本のある風景」                | 中牟田智子  |
| 「父に近づく」                 | 野澤一彦   |
| 「冬の庭」                   | 小倉一純   |

- |                                |         |
|--------------------------------|---------|
| 「墓終い」                          | 村松佐保    |
| 「騙されたほうが悪い？」                   | 高橋ひとみ   |
| 「プロフェッショナルとは？」                 | 美馬楓     |
| 「風の揺らめき」                       | 山本彩冬    |
| 「赤い椿」                          | 前岡光明    |
| 「ウイズコロナに向かつて」                  | 常風ハル    |
| 「生きやすい未来に向けて」                  | こいちゃん   |
| 「正解と友達」                        | 田中紬     |
| 「新しい京都へ」                       | 大幸信明    |
| 「世界のヒロシマ」                      | とある女子高生 |
| 「新聞と私」                         | 佐生綾子    |
| 「生きていて、生きるのが正解じゃないと思いつながら、生きる」 | 原水澤     |
| 「鬱の手記」                         | 北川聖     |

エッセイ賞でも、銀華文学賞でも多数寄せられるが、最初の発見の時期だけに特化して、絞って作品化した例は稀有である。その治療は最初にどれだけ早くそれを知り、行動するにかかっているという警告は、この作品によって確かに迫ってくる。水木選考委員の強い「推し」に同意した。

奨励賞に留まったが、「あいつのメロデー」（ツキノマコト）は、バンドの仲間の死を、熟年でのグルーブの復活に重ねて鮮やかに蘇らせている。青春時代のデビューの夢と不慮の死を交錯させ、年を経て回顧と共に復活させている手腕は、成功しているし、読ませられるが、幽霊譚にしてしまっている強引な巧さも感じないではない。「あいつのメロデー」というタイトルも、腰を落とした定着性が薄く感じられる。私は当初優秀賞でもいいと思ったが、再読しているうちに、その点の薄さが気になった。しかし力はあるので、さらにいい題材で挑戦してほしい。

今回奨励賞レベルの作品は多く、「押し寄せた」ほどの観があるが、その中で特に印象に残ったものをいくつか挙げておきたい。

「メキシコの地下鉄」（本間芳江）は、過去のメキシコ滞在を伝えた好レポートで、メキシコの事情が生き生きと立ち上がってくる。なぜ現在でも、メキシコからアメリカに密入国しようとするのか、なぜトランプがメキシコ国境にフェンスまで作ろうとするのか、国家的貧富の差が昔も今

写し絵のように戻ってくる。戦争の記憶が失われ、乏しくなりつつある現在、貴重な記録として迫ってきた。

「鍵の開いていた部屋」（森崎律子）はあるピアニストの挫折と奇跡の物語を、うまく再現したものである。強盗に入られ、命を奪われそうになったピアニストが、相手を宥め、世の中に更生させるストーリーは感動的だ。挫折の経験を通して説得する勇氣は、鼓舞される物がある。森崎氏のジャーナリストとしての資質も再認識した。

「循環」（七尾美日）は、精神病院への入院から、自然によって自分と世界を取り戻し、草花を育てることを通して大きな循環の中に目覚め、真の生命力を得ていく体験は、すがすがしい命の覚醒感を呼び起こす。タイトルはもつと具体的なものがありそうだが、この体験はかけがえのない輝きを放っていることを感じた。ここからさらに新しい世界が広がっていきそうな期待を持たせる。

佳作の中にも、「文芸思潮」誌上に載せたいいい作品がたくさんあった。なるべく多くを掲載する方向で進めることを伝えておきたい。

いつもこのエッセイ賞の審査を通してたくさん作品に接するとき、いかに多くの生きることがあり、人生のそれぞれの苦闘の華があるか、ということを感じずにはいられない。励まされる。文学とはそういうものの共有であり、それを通してその共感のうちに、傷みを分け、励まし合う力

も変わらずに存在するということが、説得力を持って浮かび上がってきた。こういうレポートは価値がある。興味深く読ませてもらった。

また佳作には留まったが、「シベリア鉄道の旅 1974」（竹本祐子）も貴重な記録として深く胸に残った。シベリアの果てしない平原を走る鉄道の旅が、ゴトンゴトンという音とともに旧ソ連の時代を蘇らせてくる。それは今も変わらないロシアの姿として、陸の遠い旅を夢見させてくれた。

特異な題材としては「首吊り遊戯」（六枝オリヒメ）も強烈だった。この世に現実的に「死にたい」人がい、死ぬことを試みているとは、にわかには信じがたかったが、「死ぬために」自衛隊に入るといふ実践があり、具体的な道具による研究があるという事実は、人間には「タナトス」という死への衝動が存在する心理学の根拠を見せてくれている気がした。

林須磨氏の「今だから話せるベニヤ板の思い出」は、昭和二十年代のアパート生活の様子が生き生きと描かれていて、貧しかったその頃のことを、逆に人情味豊かに蘇ってきて温かさを誘った。現在失われているものが浮き彫りになってくる。

「挽歌」（苑田有子）は終戦間際の満洲で、自決した若い将校の事件を描いて、印象深い。当時のハルピンの空気があることを感じる。それぞれの人生の奮闘を願い、生きていることを享受する方向へさらに花開いていってほしいことを願っている。



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ  
東海大学文学部卒  
2002「看板屋の恋」で第  
91回文学界新人賞受賞  
「狼を見る」（文芸思潮）  
「ご眷属様ジャーニー」（三  
田文學）他「長者屋敷の寝  
られぬ座敷」（合作）で佐々  
木喜善賞など 構成作家と  
して活動中

## ソムリエのテイステイングが如く

### 都築隆広

今年応募総数が少なかったがゆえに、腕に自信のある猛者達の投稿ばかりだった。

五段階評価でいうところの四前後の作品が非常に多く、上位入賞レベルのエッセイだらけなので、際立った特徴のある作品を見抜くのが厄介だ。他の選考委員の採点が出たときに、自分だけが浮いた点数を付けていると、「やべ、ミスったか？」と審美眼を試されてしまう。さながらワイン品評会の如し。「ソムリエのテイステイングかよ」と眩

きつつ、原稿を読み込むのも例年以上の難易度であった。それでも、最優秀賞は「奇妙な依頼」にすんなり決まる。人情もののエッセイとしても、北朝鮮の厳しい状況を伝えるノンフィクションとしても読める点が評価された。私としては結末で語り手が受け取る意外なお礼の品が、このエッセイにリアリティーとあたたかみを与えてくれている気がした。

ナンバーワンはすんなり決まったが、困難なのは優秀賞である。なにせ、自己基準に当てはめたところ、最終選考に残った作品の七、八割は優秀賞か奨励賞レベルなのだ。その中でも選考委員達の平均評価が高めだったのは、昭和の東京五輪の前日譚を、選手達の世話をしていた家族の視点から描いた「母の東京一九六四」。五輪と関係のない前置きの長さが気になるも、主軸となるのが母への想いであるということを主張する選考委員が多かったため、なるほどと納得した。

同じく優秀賞「ファスト」は夫の脳出血を経験していたから、己の脳梗塞には対処できたという話。読者への注意喚起としても良いエッセイである。だが、作中で登場する「ファスト」の標語が想定以上に選考会では不評だった。

この人の場合はこれで有用だったが、手遅れになる人も多いのだから、理想論過ぎるのではないかと意見も出て、肯定派と否定派と中立に分かれ、議論が白熱した。どの意図から、褒め過ぎだろうか。

個人的に推薦したい作品は奨励賞「星の旅人」。謎の奇病で身体が動かなくなった筆者の入院生活を描いたもので、ユニークな会話の数々に声を出して笑ってしまった。長年、エッセイ賞の審査に参加しているけれど、ギャグが入った応募作というのは非常に少ない。それだけギャグエッセイは難しく、評価もされにくいジャンルだ。そこは応援したいのだが、病気に関しては最後まで謎が解明されない。その謎も踏まえ、上手く結論付けはしているものの、やはり闘病ものは病名が明らかになってくれた方が読者もスッキリする。ただ、こればかりは実際に苦しんでいる作者には、どうにも出来ないだろう。

さて、最終選考作品が高レベルだらけとなった今回のエッセイ賞の状況も異常ながら、このまま平均レベルが上がり続けられれば、将来的には最優秀賞レベルで応募作が占められる時代も訪れるのではないか。そのときは日本……いや、世界一のエッセイ賞として、我々、文芸ソムリエ達も極上のワインを舌先で転がし、菌茎に染み込ませるが如く、傑作の原稿に埋もれて嬉しい悲鳴をあげそうだ。

見が正しいかはさておき、討論の争点となるのは、良い作品たる証拠であろう。

続いても優秀賞「三代鉄」。人情噺系のエッセイであるも、私は登場する隣人の性格の悪さばかりに眼が行ってしまった。しかし、五十嵐編集長から文章がずば抜けて良いと指摘され、文体や描写力への認識の甘さに恥入りつつ、「ソムリエのテイティングや」とあらためて、選考の難しさを痛感させられた。

奨励賞「彼方の我が家」は伊東で小さな旅館を営んでいた家族と、寅さんのような不思議な長期滞在の客との思い出を描いた、どこか懐かしい感じのするエッセイ。上位に来るかと思いきや、意外と選考委員支持が集まらなかったのが残念だった。同じく奨励賞「あいつのメロディ」はアマチュアバンドのメンバーが語る、怪談とも奇譚ともいふべき奇想天外な内容。選考委員評価は高かったにも関わらず、作者の略歴に「上方落語台本大賞にて大賞受賞」と書いてあったがために、新作落語を聴かされた気分になり、リアリティーが損なわれてしまった。受賞歴の明記は慎重に。

十六歳の女子高生の作「われ目」は、ある危機的状况にあってもユニークな父と娘の関係を描き、こちらも奨励賞。私的には今回、最もインパクトの強い作品であった。自分が十六歳の頃は、ここまで文章が上手くなかったよなと感



みかみ ひろし

作家  
1945 山梨県甲府市生まれ  
法政大学中退  
1982 「三日芝居」で  
すばる文学賞受賞  
著書 「三日芝居」  
「花供養」  
「月と五人の男」

## 筋立てをこえて

### 三神 弘

筋立てをこえて、説明や意味から離れて、作者の語り方や、表現に、読む楽しさ、面白さ、もうひとつの物語を見つけた。

金田一淳「母の東京一九六四」は、老人ホームを訪ねるたび、「待っていたかのように」息子の「私に語りはじめる母の思い出」である。下北半島で生まれた母は、尋常小學校を卒業すると五人姉妹であったこともあり、小母と一緒に北海道に渡り、漁村に辿り着いたという。やがて娘となり見合い話があり、「二人は否も応も言えぬ間に結婚させられ」、家族もできるが、父が療養をするなどして「金欠」に陥り、先祖代々の土地も売り払う。「息子の私」も、そうしたなかで育ち、与えられた境遇のなかで育つ。

息子に語る母の思い出は、尽きることがない。「北から

帰って落ち着くつもりが「こんどは南の伊豆大島のホテルに就職し、売店や厨房で働くことになる。やがて、トレーニンングセンターの管理人に任用される。読者には、目まぐるしく、溜息の出る遍歴である。やっと、伊豆大島の椿も海も見えてくる。

世のなからは、一九六四年の東京オリンピックを迎えようというときである。おのずと、時代の華やかさと夫婦の生活ぶりと比較され、読みどころになっていく。さて、このトレーニンングセンターに、オリンピックの陸上競技候補者たちが、暑さに順応するために合宿にくる。ここから母と選手たちの交流が描かれ、大忙しの管理人も、オリンピックを目指しているかに、すでに北の人ではなくなり、大島の人となり、その奮闘ぶりは、愉快で、懸命だ。

作品は、母の半生だが、読み取るべきは、思い出を語る母と向き合い、母の声を澄ます「息子の私」の姿である。ある日母は「あの頃はみんながいい笑顔だったのよ」と洩らし、「私」は「東京一九六四年の日々は、母にとって生涯で最も幸せなときだったかもしれない」という安堵と、感慨を得る。作品は「息子」の愛情に支えられている。早月春美「花嫁の鯛」は、「結婚した年の暮れに花嫁の実家から婚家へ鯛を丸ごと一本贈る風習」を描いていく。

この作品には、作者の立っている場所や、環境、風土、土地の感覚がある。風習は昔から今日に続いているものの、

「て帰った」とき、伯母が「あれがお父さんと教えてくれた」という。父はいつも、「私」と兄に「撃たれた弾がまだ体に二発残つとる」と「人ごとの様に話した」という。子供相手に、戯れごとをひとりだけで楽しんでいるような風貌が、読者には浮かんでくる。父が他界し茶毘に付した後、弾を捜したが見つからない。読者は、本当に撃たれて、弾が残っていたのか、歳月を経て、残っているはずがないと詮索することになる。弾はかたくなに戦争を語らなかつた父の無念さの塊だったとも思えてくる。兄は「弾はもう灰になったんじゃ」と眩く。「私」は、「あの世で父に会ったら、弾はほんまに消えたん」と問うつもりだ。父の体験が、戦争が、何もなかったかのように、架空のことだったように、手品のように、灰になっていく。

鎌田誠「父の玉子とじ」は、母を亡くした後の家族が描かれる。父は「酒もたばこもやらない国鉄職員で母の看病で十キロも痩せ」姉は「お母さんの代わりはできない」と家を出た。家庭教師をする「学生の私」に、父が初めて、そして一度きりの料理を作ってくれた。その「もやしの玉子とじ」が、忘れられない。父と息子の何も話すことのない「場」が印象に残る。いまは、母もなく、父もない。作品は筋立てをこえて、読者にもうひとつの物語を手渡していく。

注目した作品、面白い作品は、的確な言葉選びをしてい

鯛をさばくの困り果てるといふ「わたしたちの世代」のいささかの困惑ぶりからはじまり、鯛の解体までが紹介されていく。さらに、鯛を取り囲む土地の人たちの話題を、肉声を聞きたい、間近にしたい。読者も、「場」に参加したい。そのことで主役の鯛が威厳を正していく。

春本幸洋「姉妹のウナギ」は、ウナギ屋の二階で「ウナギ好きな伯母と母がよく大笑いをしていた」と語り出される。話題は終戦直後、伯母と母に連れられて出かけ川に落ちた「私」のことであるらしい。食糧難で、川魚やウナギを獲りに行ったようだ。ここから作品はウナギに関するあれこれに転じていく。仕事で出かけたとき地方の駅前で食った鰻丼から、土地による蒲焼きの工程、味わいの違いを紹介し、また、万葉集のなかに「夏瘦せに良い」という推奨を見つけたりする。ウナギに関する探究はさらに「日本人とウナギの付き合いは縄文時代の早期にまでさかのぼる」と、突き止めて、読む楽しさを提供する。伯母と母譲りなのか、格別のウナギ好きである。作品は筋立てをこえてエッセイという形式の自由さを得て、山奥の「じっくり炊いた甘露煮のウナギ」の味にも辿り着く。伯母と母の大笑いが聞こえてくる。

富登千恵子「消えた弾」は、まだまだ、どここの家庭にもある戦争の語り伝えである。「父は野戦病院から送還され杖に縋って立つのも苦しうだった」「母の告別式に遅れる。作品作りとは、書き、読みながら進めていくことなので、作者のなかに、書き手と読み手がいることになる。どうやら、作者には、書き手よりも、頼りになる読み手をもつことのほうが、導きや、励ましになるようだ。

鉛筆も大事だが、消しゴムも、尊重しなければならぬ。注目した作品、面白い作品は、推敲を経ていることがわかる。そして、ひとつの作品を計画し、書きはじめたときよりも、書き終えた後のほうが、書き手は充実しているはずだ。

はじめから作者はいない。書き終えたときに作者が現われる。これが、書くことの喜びだ。



朝鮮民主主義  
人民共和國ソウル  
金州  
光州

## 奇妙な依頼



平尾富雄

Essay

ソウル在住の李範龍氏は、日本の商社に三十年間勤務されたベテランの商社マンであり、若いころ貿易業務を中心にビジネスの指導を受けた私が「師匠」と仰ぐ人物である。

一九九六年、その李氏から奇妙な依頼を受けた。朝鮮半島離散家族の手紙を、日本で中継してほしいというのである。

当時韓国と北朝鮮との間の手紙は、北朝鮮当局の厳しい管制によって無事届く可能性はほとんどないとのことであった。対して日本と韓国の間はもともと問題はないし、

日本と北朝鮮との間は不安定ではあるものの何とか届くのだという。私が日本で朝鮮半島からの手紙の中身を取り出して国際郵便用の別の封筒に入れなおし、日本人の私が発信した形で相手方に送ってほしいのだと李氏はいう。

いささか不気味な感じの依頼に一瞬戸惑ったが、「大丈夫ですよ、北朝鮮と日本との間で文通している人は沢山いるのですから」という李氏の言葉に納得し、自宅の住所を中継点として提供することを承諾した。

練習問題に相当する部分が無数に出て来るが、いずれも難解で、しかもテキストと異なり問題の解答が示されていないので、辞書を片手に理解するのに苦戦続きであった。手書きのハンゲル文字を見るとやはり達筆の人から金釘流の人までさまざまであるが、どちらかという私には達筆よりも金釘流の方が読みやすかった。

南北の手紙の内容は対照的で、南は落ち着いており、北は悲惨な感じのものが大部分であった。

北からの手紙は、「母上、お目にかかることも叶わず胸のはり裂ける思いでお便り申し上げます」とか、兄から弟へ宛てた「年老いた母は遠くにいるお前のことばかり口にしなから、毎日見えない目から涙を流し続けている」のような悲痛なものがほとんどであったが、「金正日將軍様」を賞讃する言葉が書き添えられていることもしばしばで、この国の社会環境の微妙さを感じさせた。

この頃の北朝鮮は「苦難の行軍」と呼ばれる非常に辛い時代であったが、お金や品物を無心する記述が多く、特に薬品の入手を渴望している様子が痛切に伝わって来た。更には靴下や四度の老眼鏡の所望もあつたりして、さながら終戦直後の日本の物資不足を連想させる内容であった。医師に処方された薬の入手すら困難な経済事情が窺われ、風邪薬や神経痛の薬について薬品名や数量を詳しく書いて「何とか送ってほしい」という請願もあつた。現金や薬品

これに対する李氏からの報酬が洒落ていて、当時韓国語を勉強中であつた私の教材として手紙の文面を読んだり、コピーを取っても構わないというものであつた。

「私文書ですが構いません、ネイティブの言語に直接触れてもらいなさい、韓国語のテキストよりずっと歯ごたえがあるはずですよ」

という李氏の言葉であつたが、間もなく直面した手紙の内容は私にはかなり難解で、歯ごたえどころの騒ぎではなかつた。

かくして我が家を中継点とした「南北交流」が始まり、赤白青色で縁取りされた国際郵便が頻繁に届くようになった。

李氏との約束通り開封して中身を取り出し、別の封筒に相手の宛先を書いて私を差出人として投函する作業には、新鮮さとともにコピーを取るという後ろめたさの入り混じつた奇妙な感覚が残つた。

コピーしたものをテキストだと思つて翻訳してみると、

を南から北へ送るのがどんなルートだったのか、またどの程度届いているのかは不明だが、その後の交信から一度だけ薬品が届いたことへの感謝の返信が確認できた。南からの返信がないことへの不満の便りが連続することもあつたが、差出地の郵便局の消印の日付を見ると、手紙が日本まで届くの二ヶ月以上かかっている場合もあり、これを知り由もない発信者の不満は「さもありなん」の感じであつた。数少ない明るい感じの手紙には、兄から妹への「仁華（妹の名）！ 花雲の立ちのぼる輝かしい新年の朝に、お前の幸せを祝福する」で始まっている例があり、「花雲の立ちのぼる」はこの国の昔の歌謡「駅馬車」の歌詞そのものであることが印象的であつた。北の切手には建設、労働、団結などを象徴する絵柄が多い中、飛んでいる蝶を夢中で追つかけた雄鶏が、うっかり崖下の池にはまってしまつて大あわてしているというユーモラスな構図のものもあり、お国柄を考えると意外であつた。

李氏の計らいによつて「南北交流」の人数もかなり増えてきた一九九七年、中継を始めてから一年半が経過した頃、ソウルの李氏から突然ファクスが届いた。ファクスにはソウルの李氏の知人が一九五〇年の朝鮮戦争以来、四十七年ぶりに北朝鮮にいる二人の息子との文通が出来たと狂喜しているという文字が踊つていた。北からの手紙は、開封し



て先ず李氏あてファクスで送り、そのあと別の封筒で郵送する順序であったが、このとき私はまだコピーの翻訳をしていなかった。そのため私より李氏の方がこの重大な情報の把握が早かったのである。二人の息子からの手紙は別々の住所から発信されていたが、偶然二通とも同じ日に日本に到着していた。急いで翻訳して見ると一通には「父上！突然父上の手紙が届きました。四十七年ぶりです、人生に希望が湧いてきました」とあり、もう一通には「父上！手紙を受け取ることができたのは奇跡です。皆さんのご無事を知り、早く会いたい気持ちでいっぱいです」と書かれていたが、老母の状況を伝えたり薬の無心をしたりと書面の緊迫感にくらべると、四十七年ぶりのサブライズにしては文面の覇気が乏しく感じられた。勝手な推察ではあるが、このような喜びの場面では感情を100%表現するわけに行かない何らかの事情を窺わせる文章であった。

二〇〇〇年、金大中大統領、金正日総書記の指揮により行なわれた第一回の南北離散家族会談の折、この親子は幸運にも五十年ぶりの再会を果たすことが出来たと言う。南北それぞれ一〇〇名が相互訪問した離散家族会談のメンバーに、どのようにしてこの親子が選抜されたのかは不明だが、南北レターの中継がこれほど素晴らしい展開を見せようとは思ってもみなかった。これとは別に、北からソウ

ルまで来た息子の母親が、重病で入院中のため面会場所のホテルに来ることが出来ず、一度は面会を断念したが、南北赤十字社の特別な配慮により息子を救急車で病院まで移送し、短時間ではあるが母子の面会が果たせたという美談も報じられた。

この年の暮れ、来日した李氏に呼ばれて品川のホテルへ出向いたところ、李氏の傍らに見知らぬ老人が立っている。李氏によると先般の離散家族会談のとき、五十年ぶりに息子達と再会できた父親本人であるという。「彼はもう高齢だし、口下手でうまくしゃべれないというので、私が代弁します」と李氏は続ける。「手紙を中継してもらったおかげで五十年ぶりに息子達との再会ができたことを、彼は『とてもなく』喜んでいのです。そしてどうしても直接会ってお礼が言いたいというので連れて来ました。日本語はわかりませんから、どうぞ日本語で話してやって下さい」朴東烈と名乗るこの老人は、とうに八十歳を越えていると見られる風貌であったが、こちらから話しかけた途端に大粒の涙を流し始めた。そして前の机に手をついたまま、黙って何度も何度も頭を下げ続けるだけであった。もはやこの場に言葉は必要なく、ただ感極まった「沈黙」の時間が流れた。暫時の後、朴氏がおずおずと差し出したのは、古い石油缶一杯につまったメンタイコであった。李氏は言う。

## 受賞の言葉

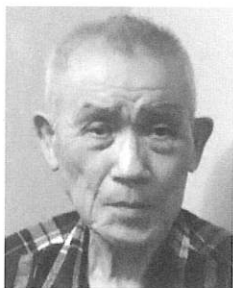
## 平尾富雄

「朴さんの精一杯の感謝の印ですよ！受け取って下さい」一目で手造りとわかる大量のメンタイコを差し出す朴氏は涙を流し続けており、これを私に渡すことを唯一の目的として来日した素朴な老人の醸し出す、如何なる言葉にも勝る無言の迫力に、戦慄にも似た感動を覚えた。これは、自分の行為がこれほどまでに人に喜ばれたという感激を、身震いとともに実感した瞬間でもあった。

朴氏とは結局最後まで会話にはならず李氏の、「お互いの心は通じ合ったと思いますからこのへんで……」の言葉に促されるように、朴氏とお別れの握手を交してホテルを辞した。朴氏の感謝の気持ちが見事に凝縮された10キロを越えるメンタイコはずしりと重く、その後長い間我が家の食卓を賑わした。

二〇〇五年、九十歳の天寿を全うされた李氏の永眠を境に、ソウルの中継拠点は事実上その機能が失われ、約十年間続いた「南北交流」は、その後一年を経ずして潮が引くように自然消滅していった。

数えきれないほどのハングルによる両国文化の学習の機会と、強烈な感動の体験をもたらしてくれた李範龍氏の「奇妙な依頼」は、かくして終焉を迎えた。



平尾富雄

ひらお とみお

- 1936 鳥取県生まれ
- 1937-46 旧満洲国在住
- 46 引揚げ
- 1954 鳥取工業高校卒業
- 54-95 富士電機(株)技術部門勤務
- 95-2004 丸紅(株)電算、研修センター勤務
- 2005 (株)玉木製作所社長

ビジネスの師匠から受けた奇妙な依頼が、その後思いもよらぬ方向へと発展していった。北朝鮮と韓国との間の手紙を日本の自宅を拠点として中継することが、南北離散家族の会談の実現に一役買おうなどとは夢想だにできなかった。このような意外な展開の模様をきちんと記録に残しておきたいと考えていたが、今回の応募をきっかけにエッセイとしてまとめることができた。

応募という絶好の機会を与えて下さった文芸思潮誌と、発表の場を作って下さった選考委員の先生方をはじめ関係者の皆様に、心から感謝の意を表したい。

## 三代鋏

優秀賞

Essay

中村郁恵  
ふみえ

狭いが自宅の庭を愉しんでいた父は、生垣にドウダンツツジを選んだ。低木で耐寒性があり、春にはスズランに似た花を咲かせ、新緑の爽、秋には深く紅葉し季節の味わいをもたらしてくれた。父は、ぐるりと囲む生垣の高さと幅を整えるべく、太い竹を何本も平行に渡し、垂直に立てた竹と等間隔に組んだ。その境界から少しでもはみ出すと剪定鋏ですぐ刈り揃えていた。庭を廻る桐下駄の軽い音と鋏が枝葉を落とす響きは、いつも同じ和音、同じリズムを刻み、空気を揺らした。質朴だが静かな呼びかけにも似たその律動は（父の音となつて私の耳からからだを貫いていった。ペランダや窓を開け放している日には、音の高低、大小など多少の差異によって、父がどの辺りを刈っているか判るほどだった。

鋏の手入れも怠らない父だった。庭のいちばん陽当たりやよい場所に自作の小振りな台を運んでくると、それは作役割を母がすべて補えるとは思えなかった。確実に齢はとる。冬になれば雪が降り積もる。隣家との境界線の問題も生じかねない。常々父を敬い慕っていた母にとつて、塀を造ることは父との更なる距離に繋がると感じたのだろう。だが、私も譲らなかつた。結局、思い出として一辺だけを残すことで承諾した。しかし、この判断が後に苦く膨らんで自分に還ってくることを、当時は想像できなかった。

父が遺した剪定鋏を（お父さんの鋏）と呼んでは、庭木とともに残った生垣を職人さんに頼りながら、母も仕事にして手入れをしていた。父や植物と会話しながら、思いを詰めた両手で開閉していたことだろう。その母が、二年ほど前から鋏を持ってなくなつた。代わつて私が（お父さんの鋏）を受け継いだ。天気の良い日には、庭に面したペランダを大きく開け、母をゆつたりとした椅子に座らせた。「石楠花の手前の木、ほらピョンと飛び出たあの葉を切つてちょうだい」

など、庭を眺める母の注文は意外と多かつた。応えるべく鋏を動かせば、私の内側ではきまつて父の音が揺り起こされた。自分のリズムと懐慕の律動が重奏したかと思えば、次第にずれて濁りを伴う輪唱となつた。

脳内出血で三月に倒れた母は、六月に亡くなつた。

その二か月を過ぎた酷暑のある日、私が実家の整理をし

業開始の合図だった。硬く絞つた雑巾を台の中央に置く。その上に薄灰色の砥石を曲がらずに乗せる。小さな盥に汲んできた水を指先に含ませ、砥石の面に数滴ずつ落とす。滴は、陽を反し微細な光を庭の緑に鏤めていった。水気に呼び覚まされた砥石の面が、鋏を待つていた。大きく開いた剪定鋏の片刃が乗せられる。閉じてこないよう固定する。刃に角度をつけ前後に滑らせる。刃は、砥石と擦れ合つて鈍い音で研がれていった。途中乾いてくるのか、父は度々指に水をつけて双方の関係を滑らかにした。その度に刃は光の粒を拡散した。実は、父が指と指の間に光の源を隠し持つていて、循環運動が成されること粒子が飛び出しているのではないか——幼い私は、白い外壁の陰から半疑の眼で覗いていた。

その父が二十四年前に亡くなつた時、実家の敷地四辺をブロック塀にするよう私は母に勧めた。父が果たしてきたと隣家のIさんが訪ねてきた。母と同年代の女性。ニコリともしない。四十年以上隣同士だから、もちろん私も挨拶は交わしてきた。だが、これまで見たことのないきつい目つきに、良からぬ事への勤が働いた。滅多に他人のことを言わなかつた母が、難しい人。なかなかのツワモノとIさんを諭していた言葉がふと甦つた。

「お宅の生垣の枝が、うちの敷地に5cm程入っているから抜いてちょうだい」

「すみません。今、刈りますから」

「いいえ。抜いてほしいの。根が境界線に入りこんでいるから迷惑しているの。お母さんが生きていたから我慢していたけれど、もう亡くなつたんだから」

母との別離が遠くないと判りながら、入院中も私は剪定を頼んでいた。実家の整理に費やす日には雑草も抜いた。なのに母を送つた途端、庭を見ると沈鬱が濃く搾られ、胸奥に沁みるようになった。盛りに向かう夏に比例し、伸びゆく枝葉が気にはなつていった。だが、道路には越境してない。家の処分が決まつたらと、公然とした盾で退けていた。

「すぐ剪定します。年内には家を整理しますので、抜くのはその時ではいけませんか？」

すると、Iさんの声はさらに荒くなつた。以前、母と何かあつたのかと疑いたくなるほどだった。けれど、何でも

話をしてきた母からは聞いたことはない。私の家から車で片道二十分。元気な時には週二日、ここ二年は週五日母を訪ねていたが、トラブルの兆候すら感じなかった。

「家を処分する時にきちんと抜きますので」

尖り口調の私は遮るように扉を閉めた。帰り際、生垣の上白い紐が渡されているのを発見した。境界の主張が、隣家から私を強く弾いた。

夕方、家の電話が鳴った。実家周辺の番号表示。Iさんと直感した。一瞬、躊躇したが受話器を取った。だが、聞き覚えのない年配男性の声だった。

「Iさんに頼まれたAという者です。生垣ですけどね、はみ出ているんですから抜いてくださいよ」

私の血管は激しく波を打ちだした。

「私は、抜かないとは言っていない。少し待ってください」と伝えたはずです。だいたい、この電話番号を誰に聞いたんですか？」

A氏は答えない。無言の返しに血流は速度を増した。ふいに、民生委員が実家の二軒隣にいることを思い出した。独居の母が、緊急連絡先として私の番号を登録したのだから。

「冬前には更地にします。決まり次第お知らせしますし必ず抜きます。境界線は登記識別情報で守られますからご安心ください。だから、もう家まで電話はかけないでください」

「いえ、一人で大丈夫です」

Iさんの立ち合いのもと、スコップを入れる度に、直立していたドウダンツツジは、土から剥離される音を振らせ少しずつ少しずつ傾いていった。私の手には剪定鋏が握られていた。生垣の最期の姿を、両親と一緒に見届けたい思っていた。Iさんは、

「だいたい今どき生垣なんて時代遅れなのよ。お宅のお父さんはどうかしていた。お母さんも、全部塀にすれば良いものを長々と残して……」

どんなことを言われても喉に蓋をしておこうと、伐採を覚悟した日に誓ったはずだった。だが、とうとう私の心は誓いを破り、喉元どころか口をも一気に突破してしまった。「それなら、母が元気な時に言ってくださればよかったじゃないですか」

Iさんは負けない。火を点けてしまった。

「我慢してあげていたのに、あなたは礼儀知らずだ。謝りなさいよ！」

業者さんの一人が、私をチラッと横目で見て

「お母さん、この庭大事にしてたよね」

もう一人も呟いた。

「そうだねえ。花も木も好きな人だった」

他人に気を遣わせて我に返った私は、眼を瞑り大きな息を一つ吐き

い」

受話器を握る私の手は、心臓と同じ震え方をしていた。翌日には、隣の町内に住む母の友人Tさんにも苦情の電話をかけたという。

「立腹ってこういうことを言うんだね。Iさんの良い評判を聞かないけど本当だね。あんまり腹が立つからツツジを切ってきたから。太刀打ちできないから気にしちやダメだよ」

全く関係のないIさんからの電話で、事が大きくなる前に抜くことを決心した。造園業者さんに状況説明し、急いでもらった。

まだ夏の光がひとすじ残る九月の朝だった。懇意にしている造園業者さん二人は、私より一足早く実家の庭に到着していた。

「お待たせしてすみません」

声を張り小走りで駆け寄る私に

「走らなくてもいいよ。このドウダンツツジの生垣を根から全部抜いていいんだよね？」と、スコップ片手に確認してきた。

「はい。全部抜いてください。今、隣の家の人を呼んできますから」

「一緒に行こうか？」

長年実家の剪定も頼んでいる職人さんだった。

「長年、ご迷惑をおかけしました」

儀礼的な感情のないお詫びの言葉を述べた。

「謝り方に心がない。冷たい人間の証拠だ」

Iさんの口は、ますます止まらなかつた。お守りを握るように鋏を持つ私の右手は、無意識に力を集めていた。マスクの中で唇を固く結んだ。何度も結び直しながら、この持ち手には父と母の指紋はまだ残っているのだろうか。私の指紋と重なり、歳月という粘度を絡めながら唯一の模様を成しているかもしれない——と、頭の片隅でぼんやり考えていた。

五十余年。根を下ろしていた生垣は、最期の鎮まりを濃い影に変えまたたき土に注ぐと一時間程で、消えた。鋏を芝生に下ろした私は、職人さんたちと窪みに土を入れ丁寧に均した。

「それくらいでもういいですよ」

Iさんは、何事もなかつたかのように、さっさと家に引きあげていった。

強くなった風が、樹々の葉を裏返した。葉裏の白さは主を失った家の空気の色とよく似ていた。

トラックの荷台に積まれたツツジの細かな葉たちは、まだ艶のある緑で光と呼応していた。運転席の窓が開き、職人さんの声が届いた。

「剪定に来ると、お母さんはいつも熱い緑茶を淹れてくれ

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしのなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

## 文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

**主旨**●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らせ、文芸の興隆に寄与する。

**募集内容**●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）。

**応募資格**●不問

**応募規定**●4000字以内（極力パソコンA4用紙出力のこと。やむをえない手書きの場合はA4原稿用紙を使用する／B4は失格）。※応募審査料1800円を郵便為替で同封のこと。パソコン原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。別紙に①応募部門（第18回「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④性別・年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。⑨応募審査料1800円を郵便為替などで同封のこと（為替には無記入・無押印）。外国からは15USドルを同封。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。

**応募先**●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

※恐縮ですが応募審査料1800円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

**賞**●エッセイ賞 ■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名は7万円／3名は5万円）

優秀作 ■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞 ■賞状・賞メダル 佳作・入選 ■賞状・記念品

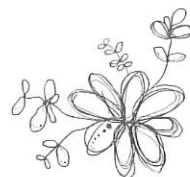
**選考委員**●三神弘・水木亮・都築隆広・五十嵐勉

**締切**●2023年3月31日（当日消印有効）

**発表**●予選通過作品発表は2023年6月25日発売の「文芸思潮」88号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終結果・最優秀作・優秀作は2023年9月25日発売の「文芸思潮」89号に発表掲載。奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

**主催**●文芸思潮

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。



「ただよ」

私は、何も言わずに深く頭を下げた。耳元をエンジン音が緩やかに横切り、アスファルトの埃が軽く舞い上がった。だんだん小さくなるトラックが、ついに見えなくなった。

私の両肩はひとつ重たい息を吐きだした。しだいに、内肌の固まっていた結合がひとつひとつほぐれて、その極みからは生温かなものが滲みでてくる錯覚を覚えた。眉を上げ見渡すと、やけに風通しのよくなった庭の真ん中で、鉄が私を見つめていた。閉じられた刃の面には、斑な錆と微細な傷が浮き上がっていた。その無秩序な交錯に今更ながら気づくと、三代に渡った時間が音もなくゆるやかに回転しはじめた。

この位置から何度仰いできただろう。親しんだかたちの空に眼をあずけると、蒼が薄く曳かれ、まっすぐに胸を透ってきた。両の手でやわらかく鉄を拾い上げ、用意してきた新しく真っ白なタオルで、大きく包んだ。

## 受賞の言葉



中村郁恵

なかむら ふみえ

札幌市在住

「グッフォーの会」（札幌）で詩作、「800字の会」（函館）で散文を錬磨中。

『文芸思潮』現代詩賞 第11,13,14,15,17回奨励賞、第12,16回優秀賞

『文芸思潮』エッセイ賞 第14回優秀賞

## 中村郁恵

絞り込んだ主題に社会性と普遍性を内包させること——七年前、エッセイという分野へ踏み入れる際、交わした自分との約束です。仕上げるのは作品であり、独りよがりな内容は日記にでも綴るべき、とも。感受したこと、人生の欠片、それぞれの景や心情をオリジナルかつ的確な表現で作品に落とし込みたい——何年経っても、目標にした納得した文を書きませんが、そこに書くことの醍醐味が凝縮さしきりです。今後への弾みとなりました。

## 母の東京一九六四



TOKYO 1964

金田一淳

母は人生の最後を私の住む三戸町の老人ホームで過ごした。料理や針仕事が好きなのに、その頃は右手が不自由になっていたので、できることはカセットで名作の朗読を聴くことや読書などに限られていた。いきおい所在なく来し方を振り返ることが多かったのか、私が面会に行くのを待っていたかのようにあれこれと思い出を語ったものだった。

母は下北半島の川内生まれで、五人姉妹の三番目。尋常小学校卒業後は家の農作業を手伝っていたが、たまたま訪れた遠縁の小母にすっかり懐き、その小母と一緒に北海道に渡ってしまった。辿り着いた所は積丹半島の美園という漁村だったという。

「漁師さんの家で手伝いをしていたんだよ。晴れた日に港を見下ろす丘に登るとね、エゾユリやいろんな花が咲き乱れていて、頬を撫でる風がとっても気持ちよかったんだよ」

そんなことを語るときの母はまるで夢見る乙女に戻ったかのようだった。

その後、母は札幌の日病院長の家で女中生活を送っていたが、見合い話が舞い込んで下北に連れ戻された。相手は同じ下北半島の大湊で米・塩を商う家の三男坊だった。北海道の漁場を気儘に渡り歩いていたのだが、長男・次男が相次いで早世したために、跡取りとして呼び戻されたのだ。二人は否も応も言えぬ間に結婚させられたそうだった。やがて、戦時中に長男・次男が生まれ、戦後になって三男として私が生まれたのだった。

昭和二十九年、私たち一家は北海道に渡ったが、六年後に父が病んで、療養が必要となったため大湊に舞い戻った。やがて快方に向かつて仕事に就き始めた父だったが、勤務先は鉄工所・旅館・病院と数ヶ月毎に変わり、遂には金欠に陥った。屋敷を解体して先祖代々の土地を売り払ったが、

高校のグラウンド・球場・体育館、そして島内ロードを活用していた。

翌年、弘前大学に入学し、夏休みに帰省した私はこの施設が東京オリンピックのための施設なのだと知った。依田郁子と吉岡コーチ、君原健二・寺沢徹・円谷幸吉など、オリンピックの陸上競技候補者たちが、暑さ順応を目的に合宿していたのだ。

「母さん、氷を下さいい」「すみません、枕カバー汚しちゃいました」「お父さん、明日の風呂は午後3時半からで頼みます」「あのおう、市外電話掛けたんだけど……」

夕食後の時間帯も管理人室にはいろいろな注文が来て、父と母は大忙しだった。

「円谷さんって口数は少ないけど素直でいい子だったよね。郁子(依田)ちゃんもけっこう懐いてくれたんだよ」とか、「Hさんって、面白い人だったよね」と、母はよくその頃のことを語った。Hさんとは陸上自衛隊所属で円谷さんたちマラソン選手のコーチだった。

「あの人はいつも笑顔で、豪放磊落らいらくってああいう人のことを言うのね。三原山の裏砂漠を走り抜けて疲れ切った選手たちに、厳しくも言うけど冗談混じりで励ましもしたわ。そうそう、塩を少し下さいって来ることがよくあったけど、あれはママシタイムって言われていたの。大島にママシの多いのがHさんには好都合だったようで、よくママ

その金も底を突き始めた昭和三十八年一月、F観光株式会社が下北で大規模な社員募集を展開した。賭けるような思いで面接に臨んだそうだが、二人ともすんなり採用され、伊豆大島Kホテル勤務と決まった。叔父を始め親族は「北から帰ってきて落ち着くのかと思ったら、今度は南へ行くのか」と、本家の転変に呆れたという。

長兄は電電公社に在職中で、次兄は千葉県に就職が決まっていた。私は朝夕の食事を叔父宅の世話になりながら、一人暮らしの高校三年生を過ごすことになった。

三月中旬、父と母は親族・知人に見送られ、伊豆大島へと旅立った。それから十日ほどして次兄も出立し、小さな借家には私だけが残った。

始めはホテルの売店や厨房に配属された父と母だったが、九月に「日本体育協会大島トレーニングセンター」が完成すると、その管理人に任用された。

私は冬休みに初めて行ったのだが、トレーニングセンターといっても小規模の施設で、予想は裏切られた。宿泊中心の施設で特段の運動設備はなかったのだ。二階建てで四人部屋が二十室ほど、二十人くらいは同時に入れる浴場、ミーティング室と小さな休憩スペース、ほぼそれだけの施設だった。食事は三食ともKホテルなので、一〇〇mほどの坂道を何度も上り下りしていたが、それも運動にはなかったのだらう。利用者は大学の野球部や陸上部が多く、大島



円谷のマラソン銅メダル

シを捕まえてきたのよ。それでね、玄関前の広場で枯れ笹や小枝を焚きながら、マムシの頭のほうからシユルルーツと手際よく皮を剥ぎ、藪から取ってきた竹に切り込みを入れて、マムシの長身を挟むと焚き火で焼くの。焼き上がるって選手たちに囁らせて、これで精力万倍、明日も頑張ろうって笑うの……。ああ、思い出すとほんと可笑しくなる」

そう言えば、私も「どうだい、一口……」と勧められたことがあった。しかし、私は尻込みしてしまったので、未だにマムシの味は分からないままだ。また、夕食帰りの坂道の途中で「野の○○、所嫌わず！」と咆哮しながら棒の木に放尿する日さんを何度か目撃している。その姿は全く厭味がなく、かえって豪快にさえ見えたものだった。

昭和三十九年十月十日、東京オリンピックが開幕した。奇跡的な秋晴れの下で、日本は世界に向けて大きな晴れ舞台を踏んだのだ。重量挙げのメダル獲得で始まり、東洋の魔女たちの女子バレー金メダルで盛り上がり、獲得メダル数は米・露に次ぐ第三位を走った。

わけても私が必見と待ち焦がれたのは男子マラソンで、中継放送は寮の食堂のテレビで見入った。メダル候補の寺沢・君原が入賞争いから遅れる中、円谷はただただトップのアベベを追いつけた。しかし、トラックに入ってまもなく、追ってくるヒートリーに気付かず、ゴール寸前で抜かれてしまった。私は、思わず天を仰いで溜息をついていた。

それでも、依田郁子が80mハードルで五位に入賞している、円谷も初日の一万mで六位入賞を果たしていたから、さらなる銅メダル獲得には父も母も歓喜した。多少なりともお世話した選手たちが成果を挙げたのだから、二人とも涙が出るほど嬉しかったに違いない。

だが、その四年後の一月十日だった。冬休みに帰省もせず寮でゴロゴロしていて、新聞を見せてもらいに寮務室へ行った私は、その新聞の大見出しに愕然とした。

「五輪銅メダルの円谷、自死 『もう走れません』と遺書」  
あの人……、なぜ？ 何度読み返しても信じる事ができなかった。

その日、母は仏壇代わりの茶箆筒の上に八重樞を一輪供えて手を合わせたそうだ。

昭和五二年、父と母は退職し、三原山の山腹にささやかな一軒家を建てた。椿林に囲まれた一角に野菜畑や花壇を作り、小鳥の餌場もしつらえた。晴れた日には海の向こうに富士山も遠望でき、まさに悠々自適の生活に入ったのだった。北海道を渡り歩き、南に流れてきた二人が、長い旅路の果てに辿り着いた最も平穏な日々だったと思ふ。



左下円谷選手。右隣が父母

ただ、それは長くは続かなかった。二年後に母は脳梗塞で半身不随、父は内臓腫瘍で余命わずかと宣告されてしまった。成り行きで、私は父と母を三戸に呼び寄せた。昭和五八年一月、父は入院先の病床で息を引き取り、やがて、母は老人ホームに入居した。

母は施設で週刊誌や新聞をよく読んでいたようで、依田郁子の自殺、翌年の吉岡コーチの他界などを見聞きすると、「みんな、先に逝ってしまう」と涙した。

「メキシコ五輪で君原さんは銀メダルを取ったでしょ。男たる者後ろを振り向くと言った父親の戒めを円谷さんは守ったんだけど、その円谷さんの声が聞こえた気がして振り向いたんだって。そうしたら、後ろから迫ってきたライアンという人に気付いたので、ラストスパートして14秒差で二位を守ったそうよ。……円谷さんがどっかで生きていたのね」

そんな母の話も聞いた。私は出来過ぎの後日談とは思えず、記憶に留めている。

「円谷さん、結婚を約束した人がいたのに、上司に反対されて破談になったんだよ」

「その上司はね、結婚を認めてほしい



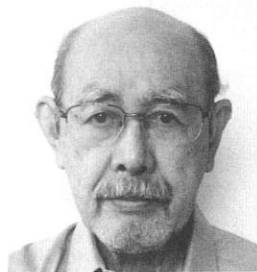
80m ハードルの依田郁子選手

と迫った日さんを北海道に飛ばしたんだって」  
「みんなが自分のそばからいなくなつて、腰痛もひどくなつて、走れなくなつて……」  
そんなふうには、

悼んでいた母も、昭和六三年七月にみんなの後を追つた。  
父と母が大島トレーニングセンターでお世話したアスリートたちは、ほとんどが他界している。あの日さんもしつしか鬼籍に入つていた。父と母が最後の職跡を遺した大島トレーニングセンターの建物さえ今はもう跡形もなく、そこは藪椿の繁茂する林に戻っている。

### 母の東京 1964

「いつだったか、日さんに断つておはぎを振る舞つたことがあるの。そしたら、円谷さんがね、美味しい、美味しいって食べるの。あの笑顔、今も目に浮かぶわ。……あの頃は、みんながいい笑顔だったのよ」  
ある日、母はそんな思い出を語つたが、その半眼の夢見顔は私の心を和ませてくれた。  
生きがいを覚え、うれしい思い出がいつぱいの東京一九六四の日々は、母にとって生涯で最も幸せなときだったのかもしれない。



金田 淳  
きんだいち あつし  
1946 青森県むつ市大湊町生まれ  
70 弘前大学卒業  
5年後から教師生活  
2006 定年退職3年後から自分史執筆  
文芸思潮エッセイ賞受賞歴  
最優秀賞 第12回  
優秀賞 第7回、第15回  
奨励賞 第8回、第13回

### 受賞の言葉

### 金田 淳

大きな励みとなる賞をいただき感激しています。ありがとうございます。  
母は、ホテルの慰安旅行で九州・関西に、次男のいた北海道に、親戚の住む東北各地にと旅し、「北から南までいつぱい歩いたなあ」と笑つてもいた。晩年は右手が使えず、好きな料理はできなかつたが、左手で字の練習をし、愚痴は言わない強い母だった。人は死してなお、思い出する者いる限り生き存えると聞いている。この一編はその一助となるだろうか。

# 新刊

文豪の死には、作品を越えて人生に深く問いかけるものがある。文豪が残した最期の言葉——それは生きることの深さとその意味を投げかけてくる。文豪の赤裸々な魂に触れる貴重な遺言集。

## 文豪の遺言

## 木内是壽



- 坪内逍遙 尾崎紅葉 樋口一葉 森鷗外 田山花袋 泉鏡花
- 国木田独步 夏目漱石 島崎藤村 芥川龍之介 永井荷風
- 谷崎潤一郎 志賀直哉 有島武郎 武者小路実篤 菊池寛
- 宮沢賢治 川端康成 小林多喜二 大佛次郎 岡本かの子
- 吉川英治 太宰治 井上靖 三島由紀夫 松本清張 遠藤周作
- 吉行淳之介 司馬遼太郎 寺山修司 向田邦子 中上健次 他

アジア文化社

1728円 (税込) 送料サービス

2017.9.1 出版

御注文は裏面を御覧下さい

作家の遺言は、死に臨んで純粋に自己と向き合い、飾り気のない一人の人間として自己の意志を発露している。それは作家自身の素顔に迫るもので、死にざまは生きざまに通じる。

# 終に見た手鏡

家森澄子

昭和二十年四月父が戦死、十七歳の姉を頭に四人の姉弟が残された。母は四人の子どもを養育するために四反余りの田畑を姉に手伝わせ、一人で切り盛りしていた。昼は田畑に夜は近所の仕立物を請け合い、いったいいつ寝ているんだろうかと思えるくらい働いていたが、ある晩急にばったりと倒れ、即入院となった。

母の体内には十二指腸虫が寄生していてひどい貧血になっていた。それに疲労が重なり、すごく身体は衰弱しているとの医師の言葉であった。

姉が付き添いとして病院で寝泊まりし、母の実家の祖母が家に来て私達の世話をしてくれることになった。

六年生の私は朝晩学校の行き帰りに病院に立ち寄り、洗濯物を届けたり、家と病院のパイプ役をしていた。毎日母に会えることが楽しみで、祖母が早く起きて作った青汁を母に届け、母がそれを美味しそう飲むのを見るのが楽しかった。

を重そうにかすかに横に振り、痩せてくぼんだ目尻から堰を切ったように涙が溢れ出た。

母の悲愴な面持ちを見て、もうこれ以上母に心配を掛けるにはいけないと思い、私は頬に伝わる涙を手の甲でなぜながら、慇懃と明るく、

「じゃあ、また明日来るね」

と、母の布団を軽く叩いて何時ものようにベッドから離れた。

いつものように、ドアのところで振り返って「バイ バイ」と手を振った。

いつもなら寝返りの出来ない母は背を向けたまま片手を振ってくれるのに、その日は、付添の姉に手伝わしてもらって、手鏡で私を写して見ている。私はいつもと違う様子に気付き、慌てて涙を拭き直し、手を振ったり、精一杯の笑顔をしたり、母の笑い顔が見たくて、おどけて見せた。しかし、母にはそれがかえって切ないらしく、手鏡が震えていた。そこで姉が、

「お母さんが疲れるから、早く帰らなさい」

と言うように目で合図をするので、しぶしぶドアを閉めた。

二月半ばの日暮れは寒く、それに帰り際に見た母の涙が、やりきれない。何もなければよいがと、思えばいつそ引き返したい思いだった。しかし家では祖母、幼い弟妹が、母

しかし、それもつかの間で、帰りに青汁の容器を見ると持ってきたままの青汁が残っている日が多くなった。それでも妹や弟の話をする時、身を乗り出して、「寂しがつてはいない？ おばあちゃんの言うことをよく聞いている？」

と、妹や弟のことを毎日のように聞いてくる。私も毎日帰るたびに「お母ちゃんはいつ帰れるの？ お迎えに行こうか」などと言う弟や妹のことを決して母には言えなかった。

日ごとに体力の衰えが目立ちだした母は、私の話に虚ろな目をしてかすかに頷いてくれていた。がしばらくして、「おまえも早く帰らないと、暗くなるから」

と、か細く途切れ途切れに言う。母の青白く血の気の無い手を私の頬にしっかりと当てて、

「あと、五分だけこうしていてもいいよ」

と、母の傍にいたい私は甘えた。すると、母は自分の頭

の様子を知りたくて待っている。本当のことは言えないにしても、帰るだけは帰らなくてはと、足は小走りになる。

玄関に入れば五歳の妹、数子が私を待ちかねて駆け寄り、「お母ちゃん明日帰れるの」と聞く。

明日は無理よと言うと、涙をためて深くうなだれる。弟はさすが二年生になれば質問も違ってくる、私が何時も同じ答えをするものだから、

「お姉ちゃん。お医者さんは母さんの退院の予定、いつだつて言うの」と聞いてくる。私はしどろもどろの言葉を返す。「それがね、体力がないから、思うような治療が出来なくて、退院の予定が立たないですよ」

砂をかむような夕食を撮り、眠れぬままにうとうととしてると、家に電話のあるお隣の叔母さんが、病院からの知らせを伝えに来てくれた。

「病院へ直ぐ来て下さい」とのことであった。

病院へ駆けつけたときには、医師が母から手を離されたときだった。駆けつけた人々が個々に母への思いを口にし、涙を流した。

何も分らない妹は、母の手を取り

「母ちゃん迎えに来たから、起きて一緒に帰ろう」

母の肩をゆすりながら、渾身の力を込めて叫ぶ妹、いつもとは様子の違うことは気づいているらしいが、死と言うことは分からないのか、その声を聞けばみんなの泣き声は



一層部屋の空気を重くする。私も母に「一緒に連れてって」と言いたかったが、妹のその声で我に帰った。自分一人ではないんだ。弟妹の日常の世話、姉の相談相手にもならなくて——。肉親は一人でも多い方が良い。みんなで力を合わせて——。

少し考えが前向きになって落ち就いたとき、数時間前に母との別れを写してくれた手鏡が、シヨート台の上に、いかにも終わりましたという風にきちんと伏せておかれていた。

この手鏡は母が嫁ぐとき実家の母が持たせてくれたという、母にとっては大切な手鏡で、実家を出てからの人生を写し励みにもなったと、よく話していたものだった。

それから歳月が流れた。

妹が嫁ぐとき、

「母さんとの思い出が、わずか五年しかなかったあんたがこれを持って行きなさい」

と、この手鏡を妹に持たせた。

それからさらに母の死から五十年の月日が経って、妹夫婦が新築した家に招待された。

妹の部屋に何気なく入ったとき、ふと気がつく、その手鏡が鏡台の上に置かれていた。妹はその手鏡を、大切に大切にしていたのだった。鏡カ

バーも新たに作り、母の好きだった白百合の刺繍も入れていた。手鏡は、その部屋でひととき目立っていた。

あの日のことを思いながら胸に鏡を押し当てている、思いがけず急に涙があいた。

母がそこに立っているのかと思い「はあっ」と驚いた。妹だった。年とともに妹は母の顔に似てきた。

「数ちゃん、あんたこの手鏡大切に持っててくれているのね」

「この鏡は私のお母さんだもん。顔もよく覚えていないお母さんは、こんな顔だったのかなあと自分を映して、見るのよ」

「そう、あんたとそっくりよ、年とともにますます似てくるわ」

今日は妹の新居で、一生忘れられない思い出の手鏡に出合った。母が出合わせてくれたのかも知れない。

妹と座敷に帰り、みんなと一緒に新築祝いの膳をいただいた。が、私の胸の内では、両親がこの場にいれば、どんなに喜ぶことか、一人胸の内面で両親を偲んでいた。



家森澄子

やもり すみこ

- 1938 岡山県倉敷市生まれ  
70 倉敷市役所奉職  
85 近畿大学短期大学部商経学科卒業  
2001 倉敷市役所定年退職



## 受賞の言葉

家森澄子

この度は、今まで生きてきた人生の中で一番悲しかったことを書かせていただきました。

親との別れは幼いときには、その年齢の哀しみ、年を重ねれば、またそれなりの哀しみがあります。拙文ですが、このような賞に結びつけてくださり、本当に有り難うございました。

これを機にいろんなところに心のアンテナを張り巡らし、書き残していきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。

嵐の女たちの封印の扉  
三十八度線  
外山寛子  
Hiroko Yamauchi

敗戦、そして  
北朝鮮収容所からの  
決死の脱出  
人が獣と化す恐怖に震えた…母と私だけの秘密  
文芸社◎定価(本体1,500円+税)



さあ、書くことをしまおう

文芸誌のエッセイコンクール等、数々の選考委員をつとめ、エッセイ教室も主宰する著者が、永年の経験から伝える書き方のポイントと書き残すことの効用

御注文はアジア文化社まで

## フアスト

宮尾美明

朝起きてとても奇妙な気がした。何がどう奇妙なのかは表現しにくい。例えばくたくたに疲れきって眠っても泥沼から這い上がるような感じとか、びよいと布団から抜け出して飛び出していきたい気分とか、妙に気分がハイとか逆にダウンとか、まあいろいろあるんだけど、そのどれにも当てはまらない。長い人生を歩いてきて以前に体験した慣れたあの気分、朝起きたときの。そのどれにも当てはまらない不思議な気分。いやいや不思議なんて甘ちよろいものじゃなく、とてつもなく不安な気持ち。痛いとこだるいとか重いと辛いとかそんな具体的なものではなく。ただ訳の分からない不安だけが覆い被さってくる気分。でもまあたいしたことなどあるまい。そのうち治るさと思っただけだか指が変。そう——変なのである。慌てて指を立ててみた、右の指はちゃんと私の意思通りに動いたが、左の指はだらんと下がっていき、思うようにならないのである。

でもよいしょと立ち上がって歩き出していつもの仕事に取りかかるに、違和感はあまりない。犬の散歩をしてくれば

しまった。あれ？ 足まで言うことを聞かないのか。焦ってしまったが、

「さあ乗って」

言われるままに担架に乗った。

「誰と一緒に来られますか？」

当然聞かれたが、

「あいにく誰もいません。唯一いる夫は半身不随で障害二級で一緒に出かけられるどころではなく介護が必要なくらいです。私一人で大丈夫です」

それじゃあとということで、救急車が走り出した。

「誰かに連絡を取ってください」

というので片っ端から電話をしたが誰も捕まらない。やっと捕まった長女に病院に来るよう頼んで、一息ついた。コロナで救急車に乗っても病院が決まらないので走れないという話を聞いていたし、お産以外入院の経験もなく大きい病院にご縁がなかったので大丈夫かしらと思っていたがすんなりと病院が決まったらしく、ほっと胸をなで下ろした。

「左の指が言うことをきかないし、左の足は力が入らないので転んでだけをしたし、ああ、これは脳梗塞だ。左が効かないと言うことは右が切れたってことで、まだまだだったかもしれない」なんて考えてムクムクとわき上がる不安を何とか治めていた。

きつと治るだろう。そう思って散歩に出た。でも、やはり奇妙だった。平らなはずの道が段差があるように傾いているのである。すぐに家に帰った。

「私、変だから救急車呼ぶね」

寝ていた夫に言う。なんとと言っても、四十代で脳出血で倒れた夫の介護を三十年も支えてきた強者である。何か変？——予感と不安は、夫が身近にいたから感じ取れたのかもしれない。夫には頼むことが出来ない。頼りの同居の次女は夜勤で家にはいない。婿もまた朝早く仕事に出て行ったのもういない。

「もしもし、こんなことで救急車を呼んでいいのか迷っているのですが、一度見ていただいで判断していただけたらと思います。何だか変なんです、私」

救急車が来る前に必要な物を全部そろえて、

「行ってくるから。頼むね。今日は娘は夜勤明けの朝帰りだから」

段取りを整えて門までの階段を歩こうとしたら、転んで

もう三十年も昔、四十九歳で脳出血で仕事中に倒れた夫に、その日に、

「今夜が山です」

と言った医者と言葉が頭の中を通り抜けていった。

「脳の大量の出血で命が助かって、植物状態か、重い障害が残ることになります」

その言葉通り集中治療室にいた夫は、自分がどこの誰か全く分からず知能は二歳まで落ち、野獣のごとくうなりながら体中のチューブにつながれていた。チューブを自分で抜き取ってしまうので、拘束されて集中治療室から出てきた。それから一年間病院に入院した。自分が誰か分かるようになるのに、一年では足りなかった。

「いつ思い出すのですか？」聞いた私に

「思い出すのではないのです。改めて学習するのです」

医者の言葉が私の絶望をさらに深いものにした。言葉も知能も運動能力もすべてが奪い去られていた。呆然と立ち尽くす家族の前でさらに呆然と、自分がどこの誰か分からず、歩くことも話すことも考えることも出来なくなった夫がいた。

入院一年の間に私が一番希望を持ったのは、仕事を終えて病院に行くと、ノートが置いてあった。開けると「あいいうえお」が、歪んだつたない字でびっしりと書かれてあった。次のページもその次のページもついに最後のページま

で「あいいうえお」に埋められていた。もう一冊には数字の羅列である。そしてミミズの這ったような字で自分の名前を書いたノートもあった。ああ、学習するってことはこういうことなんだ。偉そうに努力が足りないなどと子供に言うてきたが、自分だって本当に努力したことがあったんだらうかと思わせる血のにじむような努力だった。再度学ぶ証のノートだった。

夫は一年病院に入院し、そのあと三年リハビリセンターに入所して家に戻ってきた。障害二級だった。センターに、仕事帰りに寄ると決まって夫のベッドは空だった。そして夜の暗い病院の長い廊下を、たった一人で黙々よたよた伝い歩いていった。

「ああ〜」

二年経っても自分の妻とは思わない。面倒を見ているおばさんだと思っていたらしい。

いつ行っても寝静まった病院の廊下を黙々と歩く練習をしている夫の姿があった。努力する姿はあのノートの字と同じだった。そして驚いたことに夫は職場復帰まで果たした。大勢の職場の人に支えられて夢が叶ったのだ。

そんな過去がなかったら、今回の自分の病気に際しても、「明日になったら治るわ」

などと言って放っておいたことだろう。脳梗塞は時間との勝負である。四時間以内に対処すれば後遺症がうんと少

普通のように見えても、実際は正直恐かった。大きく前とは異なっていた。どこがどうというのとは分からないが、病気になる前と後では全く違った。私はすたこらと歩いていると思っても人から見たらすたこらどころかおぼつかない歩き方だった。実際走るのは恐かった。走ることなどなかったが、試しに走ってみたら全く走れなかった。恐ろしかった。

びっくりしたのは階段が全く降りられなかった。恐怖心がわいて奈落の底まで落ちていきそうだった。そして、床から立ち上がるのが至難の業だった。何もかもあんなに簡単にできたことができなくなっていた。何よりびっくりするくらい疲れやすくなっていた。

「ここに入れてください」

瓶におはじきを入れる。そんな作業すら時間がかかった。シャワーに入った時は恐かった。あんなに容易に出来たことがこんなにも難しいなんて、果たして治るんだらうか、こんな状態で介護など出来るんだらうか、まだまだ沢山の仕事も残っている。そうだ、思い出した。絵が描けるだらうか？ 月刊誌の絵も、注文の絵も、美術館に出す大きな絵も、何もかもが病気をしている間に締め切りが迫っていた。退院したらまずアトリエに行こう、決心した。

「本当に一週間で退院ですね」

先生があきれるほど早く出してくれたのは、多分、「夫

なくて済む。その点では早く対処したと思うが、それでも甘く見ていたのだと思う。緊急病棟の一日目はまるでベッドから起き上がることが出来そうもなかった。検査と沢山の点滴につながれ、自分が自分だとは思えなかった。何かまるで分からなかった。おしっこすら自分で行くことが出来ず採ってもらっていた。後日、顔から火が出る思いがしたが、おしっこを取ってもらったのが、なんと教え子だった。

「どういう人かなあ、何気なく見ていたら先生の名前にびっくり」

お互いに真夜中のことではつきりと顔も見えず知らないままであったのが幸いだった。病気になって何もかも人助けでいただかなきゃならないときには恥ずかしいなど思わなくてもいいんだ、とは思うものの、やっぱり恥ずかしかった。偉そうに教壇から命令していた自分の昔を思い出して顔から火が出る思いだった。二日目になると、よろよろと何とか点滴の杖にしがみついて歩けるようになり、自分でトイレにも行けるようになった。三日目には一人で伝いながら歩くことが出来た。

四日目一般病棟に移った。

「夫の介護があるので、一週間で出してください」

そんな無茶な、とは言われなかった。本当に一般病棟に移ってからは、すたこら歩くようになっていた。一見全く

の介護の一言だったと思う、もちろん事実であるが、それ以上に追いついて立てられた絵を描くことも同じくらい必要だった。退院したその日にアトリエに入った。

「無茶苦茶や」

怒られても、私にはシンナーと絵具の匂いが必要だった。いつだって追い詰められたらこの匂いに救われていた。キヤンバスに向かい描き始めるといつも通りにいかない。しかし、ブルブル震えながら始めた作業はいつの間にかいつものペースを取り戻し、絵具を出す時間はもたついたが画面を走るナイフと筆の勢いは何とか勢いをなくさずに走らせることが出来た。そして今回も同じだった。もうだめ、生きていけない、耐えられない——追い詰められるというも絵の中に逃げ込んだ。今回も同じだった。そしてキャンバスの中で再び私が呼吸を始め、動き出す力が生まれてきた。

ファストフェイス（顔）アーム（腕）スピーチ（話し方）タイム（一刻も早く）

脳溢血察知のキーワードを口ずさみながら絵の中で私はいつも通り自由に遊び始める。

# 第1回 書籍歌集賞 万葉短歌賞 歌集募集

文芸思潮では、伝統短歌に基づいた清新な短歌作品を募集します。現代流行の短歌は志操が荒れ、真の叙情が喪失されています。日本の自然の中で育まれる感情と心の営為を洗い直し、それに基づいた真心を歌うことを目指します。子規や茂吉の近代短歌の伝統を保持し、精神の芯をなす、美しい言葉としての書籍短歌集を募集します。

**作品募集要項**  
趣旨●伝統の短歌を、源流に立ち返って基盤を確かめ、日本の四季の中で紡がれる生きる力としての三十一文字を称揚する。伝統を再構築し、新たな精神の拠り所とすると同時に、それらの作品を世に広め、残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。  
募集内容●オリジナルの書籍短歌集。

**応募資格**●不問  
**応募規定**●一人歌集1冊。同じ書籍2冊を応募送付。  
別紙に①応募部門(2023年度第1回万葉短歌賞応募作品と明記のこと/封筒にも)②本名およびペンネーム③それぞれふりがな④年齢・生年月日・男女性別⑤〒住所(郵便番号は必ず明記のこと)⑥電話番号⑦職業・略歴  
※応募書籍は返却しない。文芸思潮で保存。  
**応募審査料**●5000円を応募封筒に郵便為替(何も書き込まないこと/郵便局で入手)で同封のこと。切手可。外国からは40USドル。  
**応募先**●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」万葉短歌賞 係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

**賞**●万葉短歌賞  
最優秀賞■賞状・トロフィー・賞金20万円(2名10万円/3名7万円)  
優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円(4名以上は2万円)  
奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品  
越山しづか特別短歌賞併設■賞状・トロフィー・賞金10万円

**選考委員**●五十嵐勉・他(交渉中)

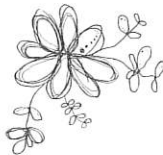
**締切**●2023年1月31日(当日消印有効)

**発表**●予選通過者は2023年3月25日発売の「文芸思潮」87号に発表。  
受賞発表・最優秀賞および優秀賞作品掲載は6月25日発売の88号に発表なども「文芸思潮」に掲載する。

**主催**●文芸思潮

※主催者から 近代短歌の、自身と生命と生活を見つめる主体精神を大事にし、真の命の叙情を三十一文字の調べにする伝統の上に立った短歌歌集を期待しています。  
美しい強い日本の言葉の深い泉にひたり、その清冽な水に触れさせてください。

●●インターネット歌集賞「如月賞」 文芸思潮インターネット短歌賞も募集中  
32首をインターネット歌集としてオンライン・公開します(有料3万円)。その中から年間最優秀賞「如月賞」に賞状・賞金10万円・記念品を授与します。こちらもどうぞ。



宮尾 美明

みやお みあき

愛知県立大学で文学を学び、武蔵野美術短期大学で洋画を学び、現在絵描き、物書き  
文芸思潮 優秀賞、佳作、入選  
食の思い出コンテスト最優秀賞  
60歳からの主張 論文二席・川柳特別賞  
シャデイ八五周年贈り物語 準グランプリ  
島崎藤村文学賞 佳作  
北野財団論文二席 その他多数

## 受賞の言葉

宮尾 美明

ファスト、この言葉を沢山の友人に紹介しました。若い頃は考えもしなかった病気が身近に迫ってきて、いつ何時自分もそうならないとも限らないと言うことで、誰も彼もが真剣に耳を傾けてくれます。感じたことを感じたままに書いたエッセイで賞をいただき本当に嬉しく思います。新たな勇気をいただきました。諦めていた色々なことにもう一度挑戦したいという意欲がわきました。ありがとうございました。

短編小説集  
**雪女郎**  
原石 寛

原石寛氏の作品を読むとその後に立ち上がってくるのは、華やかさの流れの底に沈んでいった美しいものの宿命である。美しさの陰に潜む残酷さである。無数に散り、踏みだかれて埋められていったものの姿が、三味線の音曲に乗って乱舞する。氏の文学は、生身の女性の美しさとそれを追い、滅んでいく者への鎮魂であり、憎しみと呪詛をも含んだ人間の美の影への鎮魂であろう。  
アジア文化社 —五十嵐勉

原石寛先生の短編小説集  
1600円(税込/送料共)

☆「文芸思潮」は下記の書店で店頭販売されております。

〔東京〕  
ジュンク堂池袋本店  
紀伊國屋書店新宿本店  
〔大阪〕  
MARUZEN&ジュンク堂梅田店  
〔インターネット〕  
アマゾン

## 『ウンドウカイ』という名の

## フェスティバル

末永卓幸

## ——闘争民族の血を受け継ぐ祭り『ウンドウカイ』——



メイン・イベントの一つ、一般男子の「カケッコ」

ヨーイドン！ スタートラインについた選手たちが日本語の号令の下に一齐に飛び出す。

場内アナウンスでは、コンゴウリレー（混合リレー）、レンゴウリレー（連合リレー）、イッシユウ（二周）、ハツシユウ（八周）、などと言った日本語種目の案内が流れている。

ここは、ミクロネシアのチューク（トラック）諸島。グランドでは昔ながらの日本の運動会そのままに、現地の人達によってスポーツゲームが行なわれている。

十月中旬、モエン本島（日本名・春島）で行なわれた全島大会の一コマである。

ゴールに駆け込む選手達は、競技の係員によって、イットウ（二等）、ニットウ（二等）、サントウ（三等）と呼ばれ小旗を持って表彰台に足を運んでいる。そこでセンシユ（選手）が手にするものは、シヨウヒン（賞品）だったり、シヨウキン（賞金）だったりする。

そして彼らはこのスポーツの祭典を、「ウンドウカイ」と呼んでいる。

そこには日本人の姿はまったく見えない。

ましてや日本人主催による催しでもない。

しかし目に映る光景は日本の運動会そのものである。

これは、いったい何処から来たものなのか……？

それは遠く、一〇〇年以上も前の日本統治時代にまでさかのぼる。

チューク諸島（トラック諸島）をはじめとするミクロネシアは一九一四年（第一次世界大戦）～四五年（太平洋戦争終結）まで日本の統治領だった。

当時、チューク諸島の中心だったデュブロン島（夏島）には、大正天皇の即位を記念して、大きな運動公園が造営された。島には街が開け、学校や役所、数多くの商店や会社などがあつた。後年には日本陸海軍の一大基地が設けられ、多くの一般市民をはじめ、沢山の兵隊や軍艦が島に溢れていたのである。それらの部隊や軍艦、自治体や団体などでは、士気を高めたり、交流を図るため、盛んにスポーツが奨励された。運動会もその一環で、そしてそれはチュークの人達に対し



クミ（組・チーム）のベースキャンプ



でも、例外ではなかった。学校や村々など、島を挙げての大運動会が毎年、日本人の指導の下に行なわれていたのである。

当時、各島々の中は五つの地区に分けられ、イチクミ（一組）、ニクミ（二組）、サンクミ（三組）……と呼ばれていた。この組み分けは今でもそのまま残っており、島を挙げての催し事やボランティア活動など地区分けの基礎となっている。そして現在もなお、島々の運動会は、この区域によってチームが編成されるのである。チームの応援旗には、大きく、「[CHIKUMI]」「[NIKUMI]」と染め抜いてあり、ハチマキ（チューク語）にも同じく「[CHIKUMI]



オバチャンのカケッコ



オバチャンのオーエン（応援）

負けじとまたオバサンたちや若者たちが即興の歌や踊りでグラランドを盛り上げる。そうなるともう、競技はそっちのけでグラランド内は歌や歓声で騒然となる。

グラランドの周りには、たくさんのお店が並び、学校や官庁はほとんどが休みとなる。島中のポリスが総動員され、周辺道路の交通整理や警備に当たっている。

子供から大人まで、老若男女、正に島を挙げての大運動会を楽しむことになる。

丁度この運動会が行なわれていた十月のある日、日本から外務省を通じてとある使節団が到着した。この団体は州知事への表敬訪問をはじめ、現地政府との懇談をするべく、日本政府を通じてチユーク州政府にアポイントメントを取っていた。ところが、団体が空港に到着する直前、「本日の州政府訪問は見合わせて欲しい」との連絡が入ってきた。

理由がふるっている。

「州知事はじめ、政府の要人は全てウンドウカイに出席しているため、お会いできない」というものであった。「ウンドウカイ」は、政府間レベルの用件を反故に出来るほど彼らにとつては重要なものなのである。

全島大会ともなると、各島々では何ヶ月も前から選手を

「NIKUMI」と書かれている。

センシユ（選手）、カケアシ（駆け足）、レンシユウ（練習）、ガンバレ（頑張れ）、オーエン（応援）、など、運動会関連の言葉も数多く残っており、グラランド内外で今でもよく耳にする言葉である。

オーエンはとても賑やかで、興に乗って来ると、グラランドのそこかしこで激しいオーエン合戦が始まる。『ガーンバレー、ガンバレー』と言った応援歌が、あちこちのチームから聞こえてくる。お相撲さんばりに太った現地のオバサンたちが選手団の前に出て、狂ったように踊りだす……。それを合図に、あちこちのチームの前に、それに

選考し、選手に選ばれた戦士達は、仕事も家事もほったらかしで、ひたすらレンシユウに励む。島々にはるくなくグラランドもないので、ちよつとした広場や道路などがそのレンシユウの場となる。月夜の夜ともなれば夜遅くまで道路でレンシユウに励む女や男達を見かける。

期日まで数週間ともなると、各チームは合宿に突入する。島の人は選手のために、合宿の場所や、食べ物、飲み物などを、競って提供する。



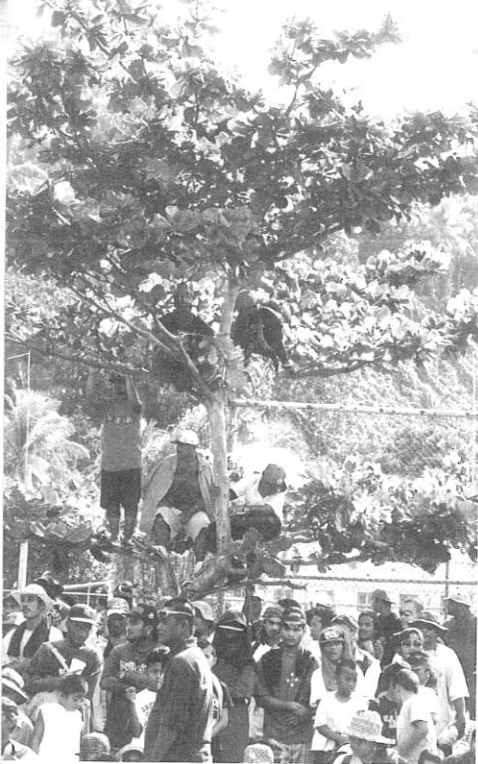
「ウンドウカイ」へのコーシン（街中の行進）



バスケット編み競争（一般女子）

ら選手団の熱気は行き交う人達を巻き込み、その興奮は次第に島中に広がってゆく。

演じられる種目は、日本時代の伝統的な種目や、短・中・長距離各種リレーなどの陸上競技種目がメインで、一般男子による「椰子の実割り競争」や、女性による「椰子の葉っぱを使った「バスケット編み競争」などローカル色豊かな種目もいくつか用意されている。中でも彼らの最も興味をそそる種目はリレー競技だ。小さい子供達から、女、男、まで、ありとあらゆるリレーが次から次へと



木の上からも競技を見守る観衆

の戦いの姿だったのかもしれない。  
 パプアニューギニアに今も残るシングシングの祭り。彼らもまた、闘争民族の血を発散させるために、この戦闘のダンスを今に伝えている。  
 「ウンドウカイ」をかくも熱狂的な闘争の場とする彼らの戦いの根源は、彼ら自身の民族の血から来るものであろう。彼らの闘争本能を存分に受け入れ、発散させる「ウンドウカイ」は、島社会を平和に保つための潤滑油ともなっている。文明人達によって「闘争」という腕をもがれた彼らにとって、「ウンドウカイ」はむしろ、彼らの血を受け継いでいく恰好のお祭りだと言えよう。

闘争民族の血を受け継ぐ祭り「ウンドウカイ」  
 ガンバレ！ チューク族の戦士達！



観衆を熱狂させる「リレー」



ヤシの実むき競争（一般男子）

手が足を滑らせて転倒する。強者の足を引つ張る。だが勝つか負けるか、全く予想もつかない。そうなるともうグラランド内はヤシの喝采である。

ルールを重要視し、比較的紳士的に遂行される日本の学校の運動会とは趣きを異にするこの破天荒な争いの「ウンドウカイ」こそが、彼らの本領発揮の場なのである。

「地理上の発見」と言われた大航海時代、チュークの環礁内に入った外国船は度々現地人の襲撃を受けてきた。その悪名は、ヨーロッパの航海者達の間では長く言い伝えられており、その後、長い間ヨーロッパ人の上陸や入港を阻んできた。

明治の半ば、一人の日本人が当時開設したばかりの貿易会社の社員としてチュークの島に上陸する。彼は現地人社会に溶け込むべく、鉄砲と日本刀で武装し先陣を切つて部族間闘争の輪の中に飛び込んでいった。文明人が上陸するほんの百年程前まで、彼らは日本の戦国時代同様、部族間で闘争を繰り返していた人達だったのである。

平和な社会となった今、彼らの闘争の血をぶつけるものはスポーツを置いて他にはない。闘争のはけ口を失った彼らが日本時代に遭遇した「ウンドウカイ」は、彼らの恰好



末永卓幸

すえなが たかゆき  
 1949 長崎県対馬市生まれ  
 立正大学文学部地理学科卒業  
 後、日本観光専門学校卒業  
 仲間4人とマイクロネシア・チューク諸島を1か月間旅行  
 以後、旅行会社勤務を経て、1978年チューク諸島に移住し旅行会社を設立  
 現地で旅行会社を営む傍ら、日本統治時代の調査研究・保存等に努める  
 現在チューク諸島在住

受賞の言葉

末永卓幸

この度、御社の栄えある賞を承りましたこと、心から感謝申し上げます。

若い頃から随筆が好きで、エッセイにもとても興味を抱いておりました。南の島に住むようになり、様々な出来事を綴るようになっていました。

御社のエッセイ募集の企画を知りましてからは、エッセイを書くことは私にとって人生の励みとなっています。これからもエッセイを書くことを人生の糧として、楽しく生きたいと思っています。ありがとうございました。